た扱いの学名が図鑑等に用いられることがあるが，それは一寸も差し支えないことである．もっとも，使用者の便を考えるなら，'自分'の使う学名が「目録」のどれに当るかを示しておく方が親切なのはいうまでもないことである．一般に提供する著述に，使用者の便を配慮するのは当然のサービスだからである．単に，標準化，安定化ということも，そのような協力態勢が組まれなければ成功しないことであり，罰則のない国際植物命名規約が重要な役割を果してきたのも，世界中の植物学者の協力があったからこそである．

もっとも，上記の議論をきっかけとして，規約そのものも大幅な改訂をはかるべきであるという考えがある．その1つとして，新種の記載にラテン語を必要とする条項を，ラテン語と英語のどちらでもよい，と改めるべきではないかとする考えがある．かってラテン語が果した役割を今では英語が果しており，英語では駄目という意見がヨーロッパの非英語国を含めて，徐々に説得力をもたなくなってきているのも事実である．植物名は分類学者だけのためのものでないことに目を向け，生物学のための学名の安定という視点で論議されることを期待したい．

参考文献

Hawksworth D. L. and Greuter W. 1989. Report of the first meeting of a working group on lists of names in current use. Taxon **38** : 142－148.

Anonymous 1990. Draft lists and generic names in current use : A call for cooperation and comments. Taxon **39** : 705.

岩槻邦男 1991 国際シンポジウム「植物名確定の手続きの改善」. 日本植物分類学会ニュース**63** : 8－11

（本報文の初校の段階で，仮リストのうち，菌類，蘚苔類，種子植物の分が届いている．それぞれ専門の研究者の協力を依頼する予定であるが，植物分類学会総会などの機会に，リストをチェックして，間違いを指摘してほしい．）

（岩槻邦男　Kunio IWATSUKI）

□Chadwick D. J. and Marsh J. (ed.) : **Bioactive compounds from plants**（Ciba Foundation Symposium 154）242pp. 1990. John Wiley & Sons, New York. 本書は1990年2月20－22日タイ国バンコックで開催されたPrincess Chulaborn研究所とCiba財団共催の植物基原生物活性物質シンポジウムの講演集である．A. R. Buttersby教授が主宰し，タイ国Chulaborn王女および各国からの14名の講演者を含むこのシンポジウムの最初のテーマは民俗薬理学，民俗植物学で伝統医学や民間薬に現れた植物とその薬効について集積された情報で，医薬農薬の開発に対する重要性を印象づけている．第2のテーマは天然活性物質をモデルとするより生物活性の強い化合物の合成である．また天然には極微量しか得られない活性物質は大量合成によって始めて薬理試験を行うことが可能になることが示されている．第3のテーマは組織・細胞培養に関するもので，これは生理的に重要な物質や酵素の生産に利用できる．また一方生合成研究の手段としても重要である．第4のテーマは有機化学者にとって魅力的な天然物の複雑な化学構造や立体構造が対象となっている．最後のテーマは分子生物学的なアプローチについてで植物への遺伝子の導入によって将来蛋白やペプチドの合成に止らず他の第2次代謝産物の生産への道を開こうとする新しい試みが示唆されている．これらの多くの興味ある報告にはそれぞれ質疑応答が続いて記録されていて，これがこのシンポジウムの実質を高め読者に最も興味をそそる内容を提供している．（柴田承二）

□謝　宗万：**中薬材品種論述上冊**，第二版543 pp. 1990. 上海科学技術出版社，上海．17.9元．本書は中国の市場調査および各種文献をもとに生薬の基原植物，形状，分布，薬効などを述べ，異物同名，同物異名の混乱状況を明らかにし，正条品，偽品，代用品などについて論じたものである．構成は中国市場に出回っている生薬のうち，基本生薬およびその類似生薬を1項目とし，全体では60項目となっている．例えば第一項目には人参，